

秋山 清著

『秋山清著作集』全12巻

評者：梅田 俊英

第11巻『アナキズム文学史』を中心に

アナキスト詩人・秋山清（1904-1988）は、戦前においては小野十三郎に協力して『弾道』（1930年）などを刊行、戦時体制直前には人民戦線の詩誌『詩原』（1940年）、さらに戦後には岡本潤、小野、金子光晴らと『コスモス』を刊行するなど社会派詩人として息の長い活躍をした人物である。また、戦争中の作品を集めた詩集『白い花』は戦時下抵抗の表現として高く評価されている。

多面的な活動をした秋山の全著作の公刊が待たれていたが、没後10年足らずでそれが実現した。刊行は、ばる出版。同社代表の奥沢邦成氏によると、秋山を記念するコスモス忌に集まっている若い人々により自然に編集委員会が編成されたという。編集委員は、息子さんの秋山雁太郎のほか、奥沢・久保隆・暮尾淳・黒川洋・高野慎三のメンバーである。金子光晴、壺井繁治氏と個人的におつきあいさせていただいたことのある評者は、両氏の紹介で秋山と鷲ノ宮の駅前の喫茶店で会い、復刻史料のことについてお話をうかがったことがある。その縁で、今回の『秋山清著作集』刊行を祝うと同時に、その内容を紹介したい。著作集は、以下のように刊行された。

- 第1巻 秋山清全詩集 2006年12月
- 第2巻 日本の反逆思想 2006年4月
- 第3巻 ニヒルとテロル 2006年2月
- 第4巻 反逆の信條 2006年5月
- 第5巻 大杉栄評伝 2006年8月
- 第6巻 竹久夢二 2006年3月
- 第7巻 自由おんな論争 2006年6月
- 第8巻 近代の漂泊 2006年7月
- 第9巻 目の記憶 2006年9月
- 第10巻 文学の自己批判 2006年10月
- 第11巻 アナキズム文学史 2006年12月
- 別巻 資料・研究篇 2007年3月

以上のように、2006年2月から本年3月までほぼコンスタントに毎月一冊ずつ刊行されたことになる。『別巻』には口絵の写真集がまず掲載されている。これにより、秋山の交友の広さがうかがえる。本書には補遺のほか、講演・対談、秋山清論などがおさめられている。これには、鶴見俊輔、小野十三郎、林静一、田村隆一、吉本隆明、埴谷雄高など多彩なメンバーが登場し、ここにも生前の秋山が多方面の人々と交友のあったことがわかる。

*

ここで書評といっても、一人で全巻通読することは不可能であるので、第11巻の『アナキズム文学史』を中心に紹介したい。秋山自身がアナキズム文学運動に加わっており、自伝的要素を含んでいるからである。第11巻のもとになった単著は、1975年9月筑摩書房より刊行されている。したがって、一般の書評というより、現代において再評価・再検討するということになる。単著自体、358頁という大部なものである上に、著作集には「Ⅱ アナキズム文学史・戦中戦後篇」「Ⅲ あるアナキズムの系譜 大正・昭和のアナキスト詩人たち」が著作集に付け加えられてたいへん分厚いものとなった。Ⅱは『文芸展望』1977年10月以後に連載されたも

のであり、Ⅲは冬樹社から1973年6月に刊行されたものである（第11巻「初出一覧」）。最初に「Ⅰ アナキズム文学史」の章立てを紹介しよう（仮に番号をふった）。

はじめに

- ①『近代思想』の頃
- ②ニヒルとアバンギャルド
- ③アナ・ボル論争
- ④昭和のアナキズム文学
- ⑤昭和の詩人群
- ⑥解放文化連盟

（付章） 解放座と解放劇場

筑摩書房の単著にあった「アナキストの文学とアナキズムの文学」（これは第10巻に収録済み）・「年譜」・「あとがき」は第11巻では略されている。「あとがき」を省略したのは頁数の制約からという。この「あとがき」は秋山の文学的立場がよくわかるものである。奥沢氏は、その「解説」で秋山が「アナキストの文学」と「アナキズムの文学」を峻別していたところに「もっとも特徴的なユニークさがある」と指摘されて「あとがき」の一部を引用されている。秋山が「アナキズムの文学」よりも「アナキストの文学」というとき、文芸家ではなく、その前にまずアナキストであれ、ということであろう。秋山にとって「アナキスト」とは、ほとんど「自由人」と同義であろう。このことは、次の秋山の言葉から理解できる。ボルシェヴィズムが文学を政治思想に従属させ、アナキズムが文学を反政治思想に従属させるならば、「それはあまりに相似形である。……文学によってアナキズム的啓蒙を考えたり思想宣伝の手段と考えることが強くなった事実には、反省を強いられるものがある。それはマルクス主義の文化政策とあまりにもひとしいからである」（「アナキストの文学とアナキズムの文学」）と述べている。ナップ系の文学者の中に、芸術を政治に従

属させようとする傾向があったのは事実で、秋山のこの指摘は重要であろう。同時に秋山は、「反政治」の活動（これ自体「政治的」であるが）を行う「アナキズム」に対しても批判的であったのである。

*

つづいて、Ⅰの内容を紹介しよう。①では石川啄木、荒畑寒村、大杉栄の文学論が検討されている。また、宮嶋資夫や安成二郎ら、大正期の文学者の活動が述べられている。②では小川未明がアナキズムに近づき、のちにはニヒリズムに傾いたことがまず検討される。また、詩誌『赤と黒』（1923年1月創刊）の衝撃性にふれられる。その宣言に「詩とは爆弾である！ 詩人とは牢獄の固き壁と扉とに爆弾を投ずる黒き犯人である！」とあるのを「時代の変革的機運を背後に孕んで出現した」（55頁）ものと評価されている。まさにその通りで、当時は詩壇のみならず、各芸術分野に広汎にその機運が広がっていたのである。例えば、画壇では『マヴォ』（24年7月）が創刊され、絵画におけるダダ運動の拠点となっている。かれらはキャンバスにボロ布や新聞紙を貼り付けたりした。また、前衛劇も行われ、天井から逆さにぶら下がったりしたのである。

この傾向に対して、秋山は③で「思い出してみるのがいい。高橋新吉による詩集『ダダイスト新吉の詩』の出現なくして、また雑誌『赤と黒』による日本の近代詩の否定なしに、プロレタリア詩運動が芸術的出発をなし得たであろうか」（73頁）と評価されている。また、本章でアナ・ボル論争は政治の上では20年代初期に起こるが詩の世界ではアナ・ボル共同がつづき、ボル側が文学を政治に従属させようとしたことにより、アナ・ボル対立が起こることを指摘されている。『赤と黒』のメンバーでアナキスト詩人であった壺井繁治が、28年ナップに加盟し

『戦旗』の編集を担当する頃のことであろう。壺井は、このことにより黒色青年連盟のメンバーに襲われ重傷を負うことになる。以前にも若干書いたことであるが、壺井に、なぜアナからボルに行ったかと問うと「アナ連中が「リヤク」(略奪のこと)をやるようになったからだ」という答えがかえってきた。そして、彼は戦後は共産党系の詩誌『詩人会議』の代表になるのだが、若き頃の『赤と黒』やアナキズム詩誌『文芸解放』などで活躍したのを懐かしそうに話してくれた。また、金子光晴や秋山とのつきあいも最期までつづいていたのである。

④では、詩誌『文芸解放』(26年創刊)、『黒色戦線』(1929年創刊)などが検討されている。秋山は当初、『文芸解放』同人にはならなかったが、大会には参加している。また、『黒色戦線』には寄稿している。文芸解放社から壺井のほか何人もボルに行ったため、同社は空中分解する。そして、アナ系だけで『黒色戦線』が創刊されたのである。それには、高群逸枝や望月百合子らが加わった。

⑤では昭和初期におけるアナキスト詩人の隆盛ぶりについて述べられている。その原因の一つに、マルクス主義的プロレタリア文学にはついて行けない「プチ・ブル的詩人」(230頁)がアナキスト詩人の集団に加わることがあったと述べて、批判的立場を示した。また、秋山はプロレタリア文学すなわちマルクス主義的立場のものだという「独占意欲」(225頁)についても不満をもらしている。

20年代後半にはアナとボルが対立して相まみえることもなくなるが、1935年にはアナ派とボル派が共同することになる。その機会を作ったのが秋山だったのである。1934年壺井繁治が「ナップの一員として検挙されていた」のが「娑婆に戻っているときいて、私が訪ね」という。こうして、翌35年「プロレタリア文学の

現状を語る会」が開催される。秋山や壺井、アナキスト詩人・岡本潤らが中心となった。会合には中野重治らマルクス主義的立場の人も参加した。その記録がⅡの「共同戦線の発想と敗走の歴史」にある。こうして、40年には本書評の冒頭にかかげた『詩原』が刊行されるのである。その創刊号には上記3人のほか、小野十三郎、金子光晴、山之口獺ら錚々たるメンバーが書いている(398頁)。ちなみに、「敗走」とは、戦時体制下でアナキスト文芸が潰滅することをいう。この章は、秋山が当事者であることによりふり返ってみる必要もあるし、そこに書かれた記述は、史料的にも価値が高いといえよう。

今回刊行の完結した著作集には、『日本の反逆思想』などのようによく売れた単著のほか、雑誌などに執筆したものも集められている。現在、詩雑誌などは目に触れにくいものであるが、これで秋山の全仕事を通観できることとなったのである。秋山の仕事は、詩だけでなく評論など広範にわたる。そのため、今回紹介した『アナキズム文学史』なども再評価・再検討していくことが必要となるであろう。これまでのプロレタリア文学史といえば、マルクス主義的立場のものだけが優先された通史だったが、現在の時点ではそれだけでみるのは問題であろう。各派の分裂・対立だけでなく、共同の歴史も含めて総体的な歴史像を作り上げていくことがこれからの課題であろう。

『秋山清著作集』全12巻、バル出版、2006年2月～2007年3月、定価4800円〈1巻〉、3200円〈2~8, 10巻〉、3500円〈9巻〉、6500円〈11巻〉、8000円〈別巻〉+税)

『秋山清著作集・第11巻・アナキズム文学史』バル出版、2006年12月、ix+916頁、定価6500円+税)

(うめだ・としひで 法政大学大原社会問題研究所兼

任研究員)